

シェーンベルク：《グレの歌》

オーケストラだけで約 150 人、そこに 5 人の歌手と 1 人の語り手、さらには男声 4 部合唱と混声 8 部合唱が加わる空前の声楽曲の完成に、シェーンベルクは 12 年の歳月を費やした。きっかけは 1899 年の暮れ、ウィーン・トーンキュンストラー協会主催の歌曲集コンクールへの応募だった。課題に選ばれた素材は、イエンス・ペーター・ヤコブセンの小説「サボテンの花開く」に登場する劇中劇——デンマークの実在の王ヴァルデマール 1 世と、愛人トーヴェの物語「グレ伝説」。完成した《グレの歌》に、オペラでは見せ場となる重唱曲が皆無なのは、もともとピアノ伴奏による歌曲として構想されたため。それが、演奏時間約 1 時間半・全 3 部からなる大作へと肥大化したのだ。初演は 1913 年 2 月 23 日、ウィーンにてフランツ・シュレーカーの指揮で行なわれ、大成功を収めた。

アルバン・ベルクの解説によると、ピアノ伴奏による作曲は 1901 年 3 月には完了していたという。今日では逸話となっている 48 段の五線紙を特注し、オーケストレーションが始まったのが同年 8 月。しかし、それも 1903 年に第 3 部の「農夫の歌」で中断。オペレッタのオーケストレーションやキャバレーでの指揮など、生活の糧を得る必要から望まぬ仕事に時間を費やすなければならなかったからだ。救いの手を差し伸べたのは R. シュトラウスだった。彼がベルリンの音楽院の教授職を紹介してくれたことで生活も安定し、1911 年、ベルリンの地でようやく完成をみたのである。作曲が長期に及んだため、第 3 部のオーケストレーションが先行部分とかなり異なっている点は、作曲者も認めている通りである。

第 1 部では、管弦楽の序奏に続いて、ヴァルデマール王がグレ城を訪れてトーヴェと恋に落ち、愛が成就するまでの過程が、王とトーヴェによって交互に歌われていく。そして第 1 部・終曲の「山鳩の歌」では、トーヴェの死と葬儀、王の悲嘆が山鳩によって知らされる。短い第 2 部は、ヴァルデマール王の 1 曲のみで、トーヴェの死に対して神への呪いが吐露される。第 3 部では、涙神ゆえに死靈となったヴァルデマール王とその家臣による「荒々しい狩」が始まる。恐れおののく農夫、対位法の粹を極めた男声 4 部合唱、レポレッロあるいはパパゲーノにロマン派の衣装を着せたような道化師クラウス——個性的な面々の歌唱を通して、情念渦巻く闇の世界が描かれる。やがて夜明けが近づくと、狂乱も静まり、ヴァルデマール王の魂の救済が暗示される。新たな生命の覚醒を告げる「夏風の荒々しい狩」に至って、語り手が登場。輝ける太陽が昇る様子を混声 8 部合唱が盛大に賛美して終幕となる。